誌上写真展

東日本大震災【被災地レポート】

集会場でしか遊べない子どもたち ～ボランティア活動で知った現実～

中央大学法学部3年
白倉 隆之介さん

宮城県気仙沼市は被災後2度目の正月を迎えた。
街が復旧しつつあるなか、子どもたちの心に衝撃のツメ跡がまだ残る。
被災地で生まれ、被災地でボランティア活動をする中央大学法学部3年・白倉隆之介さんが
制限・規制内で生活する子どもの日常をレポートした。

大震災から2度目の正月

私は、今年も気仙沼市の面瀬（おもせ）地区＝地図参照＝にある仮設住宅の集会所で年越しを迎えた。あの大震災からもう2年、いや、まだ2年、いろいろな思いが交錯するが、それでも、こうして穏やかな元旦を住民の皆さんと共に迎えられたことが何よりもうれしかった。

私たち中大生が行っている、「コミュニティ支援」のボランティアは、住民の皆さん方に受け入れられて初めて成り立つものである。なぜなら、本来、仮設住宅は、住民の皆さんの大切な自宅であり、集会所は地域住民や自治会の共有の財産である。私たちのようなよそ者がずけずけと入っていい場所ではない。しかし、面瀬仮設の住民の皆さんは、私たちを温かく受け入れて下さった。

いつも私の訪問を楽しみに待っていてくださる住民のおばあさまとの一枚

気仙沼市は、県庁所在地の仙台市から車で約3時間の宮城県最北に位置している

ボランティアの知識や経験に乏しい私たちであるが、「中央大学」の看板を背負い、自分たちなりの目標を持ちながら1年余りにわたって支援活動を続けている。今回は7人で仮設住宅を訪問した。

話を聴くって難しい

支援活動の大部分を占めるのが、住民の皆さんとの語らいである。集会所に住民の方がいらっしゃることもあれば、ご高齢の方の場合はお宅に伺うこともある。その際、私たちが大切にしていることが2つある。

1つは、お話を「聴く」ことだ。住民の皆さんが私たちに話すことで少しでも気分が晴れやかに、あるいは穏やかになれるよう、私たちは傾聴の姿勢や手法にも気を配っている。正対するよりも斜めに座ってお話を聞く。お話の内容を丁寧に承認・反復する。「傾聴」を言葉遊びで終わらせないよう、このようなことを日々、仲間内で意識するようにしている。

お話の中では、善悪などの判断はしないようにしている。何が良くて何が悪いかは住民の皆さんが判断されることであり、ボランティアが自分の価値観を押し付けるようなことはしてはならないと思っている。

ボランティアはあくまでサポーターであって、人生の主役は住民の皆さんご自身だ。

語らいで大切な2つめは「沈黙」の時間である。ボランティアを始めて間もないころ、沈黙がとても怖かった。数秒間沈黙が続いてしまうと、「何か喋らなきゃ」と焦った。しかし、一緒にボランティアをしている看護師の方から、「言葉だけがコミュニケーションの全てではない。感情に焦

2012年の大晦日、面瀬仮設の住民の皆さんとの記念写真

2012年夏に福岡の看護大ボランティアと一緒に行った「人間汽車」の様子。
狭い集会所内ではあるが、子どもたちはとても生き生きと、楽しそうであった

集会所内の本棚。全国から多くの支援が寄せられ、
子ども向けの本も多くある

点を当て、相手の一つひとつの表情や仕草をもっと大切にしなさい」とアドバイスされ、以来徐々にではあるが、沈黙もコミュニケーションの一手段として、とらえられるようになった。

笑顔の“輝き”から感じること

子どもたちとの関わりも、私たち大学生にとっては重要な役割である。集会所には、3歳の幼稚園児からひげの生えてきた中学生まで、多くの子どもたちが遊びに来る。気仙沼市では震災以降、市内のほとんどの中学校で校庭に仮設住宅が建設された。中学生が部活動の練習場を求めて、仮設住宅の少ない小学校へ流れ込み、押し出されるような形で、小学生が遊び場を失った。

広い校庭で思い切り遊びたい年ごろだけに不憫だなと思う。仮設住宅は床の音が響いてしまう造りになっていて、部屋の中では大きな声も出せない。せめて集会所では、思い切り声を出して走り回らせてあげようという思いで臨んでいる。

そうはいっても、男の子は走り回っているうちにけんかが始まり、エスカレートして殴り合いになることもある。学校の先生や保護者であれば、けんかを止めさせなければならないが、ボランティア大学生はどうすればいいのか。何か一つの正解があるわけではないだろうが、普段は優しいお兄さん・お姉さんであっても、争いごとは止めさせなければならない。

お預かりした子どもにケガをさせてはいけない。保護者の皆さんの信頼を裏切ることになるし、何より、少しだけ人生の先輩である私たちが、彼らに社会のルールを教えることが最も期待されていることだと思う。

一人っ子の私には、兄弟げんかの経験がないものだから、けんかへの対応には苦慮する。数分前まで仲良く遊んでいたのに、ちょっと目を離したら大げんかになっていることもしばしばある。子どもの行動は実に予測しにくい。昨年8月にも、けんかをタイミングよく止められずに事を大きくしてしまった。試行錯誤の日々である。

集会所の中は確かに狭いが、無邪気に遊ぶ子どもたちの目はキラキラと輝いて本当に楽しそうだ。先ほど「不憫」と書いたが、私が勝手に思っていることで、あの笑顔の輝きを見てしまうと、その言葉は失礼かもしれない。

大人たちが狭い場所だなと思っても、友だちがいて、おもちゃがあれば最高の遊び場になる。仮設住宅の子どもたちには、この集会所という空間で、社会のルールを学び、友情を育んでほしい。私たちもお手伝いをさせていただく。